氏　　名　大塚直子（おおつか なおこ）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第308号
学位授与の日付　平成18年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　ドゥルーズのシステム
——芸術作品の機能をめぐって

論文調査委員　（主査）教授 篠原資明　教授 岡田温司　助教授 多賀　茂

論文内容の要旨

本論文は，ドゥルーズの思想の全体を，そのイマージュ論を軸に，ひとつのシステムとして再構築する試みである。その思想のなかで，芸術領域につねに特権的な位置を与えつづけ，作品のあり方を思考のモデルとしてとらえていたドゥルーズは，そもそも，芸術的イマージュのうちにいかなる機能を見出していたのか。それを問おうとするのである。

本論文の考察の中心となるのは，加速度的にイマージュ論が展開される80年代の著作群だが，イマージュ論の展開を促した主要な論点は，60年代の著作『意味の論理』のなかに出揃っているという点を確認することで，芸術をめぐって展開される一貫した思考の枠組みが明確化される。

第一章では，『感覚の論理』にみられる「芸術の使命とは時間を感覚可能にすることである」という発言から出発し，その時間論を検討することからはじめる。『差異と反復』における「時間の三つの総合」と，『意味の論理』の「時間のふたつの読解方法」とを付き合わせて検討することで，その論理の根幹にある「現実的な時間」と「潜在的な時間」との対立を浮かび上がらせようとするのである。まず，身体を中心に構成される現実的な時間の構成を，ドゥルーズのベルクソン読解とともに確認し，つぎに，時間そのものの構成原理としての潜在的な領域を，ドゥルーズのニーチェ主義とともに検討する。現実的な経験の地平から逃れる「純粋な時間」としての条件の地平へと移行することで，身体的知覚および経験に絡み取られる以前にある時間の全体を，個に内在する「力能の変位」として規定しなおそうとするのである。こうして時間とは，なによりもまず生成変化としての存在の形式であることが明かされ，存在の外部にある座標軸としての時間が退けられることによって，生成と存在をめぐるプラトン的な二元論が転倒されるのである。そして，時間の条件としての当の領域，ただ生成変化のみによって構成される潜在的なこの領域を映し出すイマージュとして，『時間－イマージュ』の中心的概念である「結晶－イマージュ」が議論の中心に浮上してくる。ドゥルーズがそこにみるのは，過去・現在・未来という経験的な意識＝時間に分節されえない時間の本性である。この段階で，芸術作品にその表現が課されるのは，経験的な時間ではなく，身体的知覚を逃れた時間の本性であり，ドゥルーズの思想の中心をなす超越論的な領域のイマージュ化であるという点が明確になる。

ドゥルーズが構想する作品の機能とは，経験の地平にではなく，超越論的な領域に連なることによって，経験を超えた外部を出現させることにある。けれども，経験の条件としての超越論的な領域とは，作品の外部にア・プリオリに存在するものではない。それはイマージュと共立することによってはじめて出現するというドゥルーズの主張を検証するために，第二章では，「表層」概念に焦点をあて，表層における意味生成のプロセスを確認しながら，表現（イマージュ）と表現されるもの（時間）との同時性を検討する。まず，生成＝存在という等式が成立した時点で，名詞的な事物の集積としての世界が瓦解し，生成変化するものの流動に連なる動詞が前景化することを確認し，つぎに，主語＝名詞ではなく，述語＝動詞からなる世界の構成をみとどける。その動的な世界に対するイマージュとは，存在の原理としての時間が展開してゆくプロセスとしての運動であり，そのプロセスを映し出すとき，イマージュは，「運動－イマージュ」となる。それはもはや，身体＝

物体の運動の再現ではなく，生成変化そのもののイマージュ，個と世界の表現運動と呼ばれうるだろう。

存在が時間の論理によってとらえなおされると同時に，存在＝時間＝力能の展開として運動－イマージュが規定しなおされる。それによって，固定的な事物，固定的な主体の可能性は潰え，すべてが世界の流動に巻き込まれる結果，主体概念もまた変更をせまられるのである。第三章では，まず，生成変化＝時間＝存在の表現運動から派生的に産まれる「主体」の形成プロセスを確認する。つぎに，主体化が果たされる以前の原初的な身体のあり方を検討し，世界と身体との結節点に生じるものとしての感覚をめぐる規定を考察する。問題となるのは，なによりもまず，世界の流動を映し出す媒体としての物質＝身体であり，個に対してではなく，世界に対して存在しつつ，同時に，世界に対するひとつの観点としてある個の存在である。すべてが動的なイマージュの連鎖として描かれる世界のなかで「世界－感覚－精神」はつねに同時に生成し，同時的であるかぎりにおいて，生成変化の意義が前景化する。このとき，芸術作品に与えられる俯瞰性あるいは半主観性の形式は，世界の始源的要素とその展開をとらえつつ，その生成を外部へと接続させる逃走口としての機能を明らかにするのである。

論文審査の結果の要旨

ジル・ドゥルーズは，20世紀を代表する哲学者の一人である。本論文は，ドゥルーズ哲学において芸術が特権的な扱いを受けていることに着目し，芸術の機能の問題を，その哲学の徹底的な読みをとおして，究明しようとするものである。

ドゥルーズは1960年代の末に『差異と反復』と『意味の論理』という著書を刊行したが，これら両著作の間には，時間の論じ方に相違が見られる。前者では，差異と反復の一体性という観点から時間が論じられるのに対して，後者では，クロノスとアイオーンの対立が鍵となるからである。『差異と反復』がドゥルーズ哲学の文字どおりの主著であるのに対して，『意味の論理』は言語論を中心としたものであることも手伝ってか，多くの場合，『差異と反復』の時間論が重視され，『意味の論理』の時間論は軽視される傾向にあった。本論文は，これら二つの時間論の違いを放置することなく，むしろ『意味の論理』の時間論にこだわりつつ，二つの時間論を徹底的に比較検討することで，両者に共通する基本モチーフを剔抉してみせた。それが，「現実的な時間」と「潜在的な時間」との対立である。クロノスは「現実的な時間」の側にあり，アイオーンは「潜在的な時間」の側にある。これは本論文の独自の視点であり，大きな功績であることを指摘しておこう。

80年代になるとドゥルーズは，絵画論と映画論を刊行する。絵画的イマージュ論と映画的イマージュ論である。本論文は，それらを芸術的イマージュ論と見なしたうえで，ドゥルーズ哲学におけるその詳細な位置づけを試み，芸術的イマージュ論をとおして，芸術の機能を問おうとする。先に時間論の検討で得たものが，ここで生かされるのである。

ドゥルーズの映画論は，『運動－イマージュ』と『時間－イマージュ』の二巻構成をとる。前者では，時間を間接的に表現する映画が扱われ，後者では，時間を直接的に表現する映画が扱われる。時間－イマージュの典型的なタイプとして示されるのが，「結晶－イマージュ」である。潜在的なものこそが，時間そのものの構成原理であるとすれば，それはただ生成変化のみによって構成される。映画が時間を直接的に表現しうるとするならば，なによりも潜在的な時間を映しだすことができねばなるまい。本論文で「結晶－イマージュ」が重視されるのは，そのためである。ただ，「結晶－イマージュ」の特権性を確認するだけでは意味があるまい。

本論文においては，むしろ，表現としてのイマージュと，表現されるものとしての時間との同時的な生成，いわば共生成に着目しつつ展開される表層論こそ，評価されるべきだろう。クロノスとアイオーンの関係，「現実的な時間」と「潜在的な時間」との関係も，それによって明らかになると思われるからである。本論文で指摘されるとおり，ドゥルーズ哲学にとって重要なのは，存在か生成か，もしくはアイオーンかクロノスかという二項対立ではなく，存在を存在たらしめるそのプロセス，まさしく二項のあいだにある移行状態である。この移行状態が実現の線へと連なるにまかせ，潜在的なものたちがそもそも持っていたはずの差異が無化された世界に甘んじるか，何らかの抵抗を示し，この持ち分を別のシステムにずらすこと，別のシステムのうちで反－実現することによって，差異が差異として肯定される真の反復を創出するか，ドゥルーズの芸術をめぐる思考に賭けられていたのは，この抵抗だったと，本論文は見る。

たしかに，ドゥルーズは逃走を語る。この逃走とは，単なる逃避ではない。本論文で，芸術の機能を逃走のうちに見るとき，反－実現という要因を重視する。逃走とは，潜在的な領域で生起する理念的にして十全な出来事の実在性を損なわないまま，実現の線をずらし，＜別の仕方で＞存在を結実させることにあるからである。その次第は，つぎのように明快に提示

される。

⑴そもそも世界を構成している潜在的な領域の理念的な出来事が，時空的規定を受け入れながら，さらには他者構造を経由しながら＜実現＞するとき，⑵ある一定の状態としての世界が立ち現われ，それが私たちの知覚に当てはまるかぎりにおいてのみ＜ものの状態＞が規定され，「現実」として認識される。⑶とすれば，この知覚が構成するこの「現実」を逃れるもの，いわば「現実の残滓」は，潜在的なまま存続し続けていることになる。⑷この残滓に別のかたちを与えること，実現とは別の線に沿って，この残滓とともに生成する新たなイマージュを創出し，それによって別の存在の仕方を示す。

しばしば曖昧に語られがちな逃走を，このように明解に語りえたこと，しかも，ドゥルーズの時間論を独自に読み解くことを介して語りえたことは，高く評価さるべきだろう。本論文には，ライプニッツの位置づけなど，ほかにも注目すべきところが多々ある。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年10月28日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。